巻頭言

花見

理事長　永井 俊彦

一月下旬、友より白梅の一枝が届けられた。

春を告げる良い香りである。梅（玉梅）は蝋梅、茶梅（山茶花）、水仙と共に中国では「雪中四友」と呼ばれ、これらの花は何れも雪中、厳寒に開花し馥郁（ふくいく）たる香気を放つものです。

“梅”は外来種で中国から3世紀終わり頃から6世紀頃に渡来したと云われています。今では「花見」と言えば“桜”ですが、飛鳥・奈良時代から平安時代初期には貴族を中心に“桜”より好まれていたようで、天平2年（730）1月13日には大伴旅人の邸宅で「梅花の宴」が行われた記録が残っています。そして奈良時代後期に編纂された「万葉集」では“梅”を詠んだ歌は「梅花の宴」で詠まれた32首を含め110首に対し、“桜”は43首ですが平安時代の勅撰和歌集である「古今和歌集」（延喜5年（905））では“梅”18首に対し“桜”70首と逆転しています。

また、京の御所・紫宸殿、雛飾りにみられる“右近の橘”、“左近の桜”ですが、桓武天皇が平安遷都（794年）した時には左近には“梅”が植えら火災などで枯れた時にはその都度“梅”が植えられていたそうです。この“梅”に代わって、今のように“桜”が植えられたのは鎌倉初期の説話集「古事談」（源顕兼（あきかね））によると仁明天皇（833～850）の時と云われています。ちょうど「古今和歌集」の“梅”18首に対し“桜”70首と逆転している時期に一致しています。

「日本後記」に弘仁3年2月12日（812年3月28日）に嵯峨天皇が「花宴の節」を催したと記されていて今でいう3月末なので時期的に“桜”が主役だったといわれています。そして鎌倉時代以降、“桜”は華やかさ、散り際の良さで武士や庶民に好まれ“花見”と言えば“桜”となりました。

庶民の間に現在のような“花見”が行われるようになったのは江戸時代で、八代将軍吉宗は“享保の改革”の一つとして飛鳥山（北区）、御殿山（品川区）、隅田川の土手に桜を植えさせ庶民に開放し、酒盛りも許可しました。こうして“花見”は春一番の娯楽となったのです。

皆様にとって今年の“花見”は？